

2025 年度インターンシップ事後報告資料

名前	高橋琴羽
記入日	2026 年 2 月 9 日
1 日目： 1 月 12 日（月） 活動場所：	
<p>活動内容：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・パクスウォンニュース本部長 懇談会 （オーマイニュースオフィス） ・良い文章の書き方/イジュンホシニアエディター （オーマイニュースオフィス） ・K カルチャーを学ぶ/ イソンピルシニア記者 （オーマイニュースオフィス） ・夕食/ オヨンホ代表 	
<p>感想や反省点：</p> <p>良い文章の書き方/イジュンホシニアエディター （オーマイニュースオフィス）</p> <p>記事を書く上での韓国語の正しい使い方や、読み手に伝わる文章の構成について総合的に学ぶことができた。特に印象に残ったのは、主語を明確にすることや、抽象的な表現を避けることの重要性である。また、情報を単に付け足して文章を長くするのではなく、本当に必要な内容だけを残し、削る視点を持つことが大切であるという指摘は非常に印象的だった。文章を書くこと自体は難しくないが、短く明確に伝えることは意識しなければできない作業であり、読み手の関心を維持するためにも重要な要素であると感じた。今後文章を書く際には、「何を伝えたいのか」を常に意識しながら、不要な表現を減らすことを心がけたい。</p> <p>K カルチャーを学ぶ/ イソンピルシニア記者 （オーマイニュースオフィス）</p> <p>K カルチャー、特に韓国芸能の海外進出について実際の現場の視点から話を聞くことができ、大変興味深かった。韓国の芸能コンテンツが積極的に海外市場へ進出している一方で、日本の芸能が比較的国内市場中心である理由として、市場規模の違いがあるという説明は非常に納得できた。さらに、近年は韓国が他国と共同で映画制作を行うケースが増えているという点にも驚いた。共同制作によって両国の視聴者を確保でき、市場拡大につながるという戦略は非常に合理的であり、韓国コンテンツの強さの一因であると感じた。今回、芸能という分野に焦点を当てた話を通して、これまで知らなかった背景や戦略を知ることができ、自分の視野を広げる良い機会となった。</p> <p>総合</p> <p>初日であり、また外国語での初めてのインターンシップであったため非常に緊張したが、関係者の方々のサポートのおかげで徐々に環境に適応することができた。</p>	
<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;">  <p>麻浦区オーマイニュース訪問</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>良い文章の書き方教育聴講</p> </div> </div>	

活動内容：

- ・ 사는 이야기教育/ チェウンギョンシニアエディター （オーマイニュースオフィス）
- ・ 사는 이야기実習 （オーマイニュースオフィス）
- ・ 韓国高齢者人力開発院 広報部長 懇談会-超高齢社会と高齢者の仕事口（韓国高齢者人力開発院）
- ・ 夕食/韓国高齢者人力開発院

感想や反省点：

사는 이야기教育

実習では、記事を書く上で必要な要素について学んだ。特に「사는 이야기」とは何かについての説明が印象に残った。사는 이야기는自分の身近で起こった出来事を題材とする点ではブログと似ているが、単なる個人の記録ではなく、社会的な意味や読み手にとっての価値を持たせることが記事として重要であると理解した。また、記事を書く際には、人に読んでもらうことを前提とし、どのように関心を引きつけるかという視点が必要であることを学んだ。これまで文章を書く際は自分の伝えたい内容を中心に考えていたが、今回の教育を通して、読み手の立場を意識しながら構成や要素を選ぶことの重要性を実感した。

韓国高齢者人力開発院

日本と韓国は少子高齢化という共通の社会問題を抱えており、互いに学ぶ点が多いと感じていたため、今回の懇談会は特に楽しみにしていた機会の一つであった。日本にもシルバー人材センターのような組織が存在するが、実際に社会の中でどのような役割を担っているのかを十分に理解していなかったため、今回をきっかけに調べ、比較する機会となった。高齢者の精神的健康を保ち、地域コミュニティを形成する役割を担う点において、非常に重要な組織であると感じた。一方で、年金受給のみでは生活が難しい現状や、報酬水準の問題、今後増加していく外国人高齢者への対応など、多くの課題も存在していることに気づいた。これらの問題は高齢者支援の組織だけで解決できるものではなく、他の団体や社会全体が関わりながら取り組む必要があると感じた。また、新聞記者はこうした社会問題に人々の関心を向けさせ、見えにくい課題を社会に発信する役割を担っており、社会的意義の大きい職業であることを改めて認識した。



사는 이야기教育



韓国高齢者人力開発院

3日目： 1月14日（水） 活動場所：

活動内容：

- ・写真・映像教育/クオンウソンシニア記者 （オーマイニュースオフィス）
- ・写真・映像実習 （清溪川・広蔵市場）

感想や反省点：

今回の教育を通して、カメラの扱い方や写真の構図について学んだ。特に印象的だったのは、記者が使用するカメラの上部にスマートフォンを取り付け、カメラと同時にスマートフォンでも撮影を行うという工夫である。これにより、撮影した写真を即座にニュース本部へ送信することができ、速報として迅速に記事を配信できる体制が整えられていることを知った。また、動画に関しても、以前は編集作業が必要で記事化までに時間がかかっていたが、現在はAI技術の発達により、人物の切り抜きや簡単な編集を即時に行うことが可能となり、記事作成の大幅な時間短縮に貢献している点に驚かされた。カメラマンの高い技術力だけでなく、現場での工夫や効率化への意識の高さを強く感じた。

さらに、肖像権についても詳しく学ぶことができた。韓国では、顔全体が写っていなくても、身体の一部などから個人が特定できる場合には訴訟を起こすことが可能である一方、公人については原則として撮影に制限が少ないという点が特徴的であった。また、アメリカとの制度の違いについて比較したことで、国によって報道におけるルールや価値観が異なることを理解することができた。加えて、記事にインパクトを与えるために写真の合成や操作が行われた過去の事例が紹介され、それを受けて韓国では、撮影者が撮影した写真に手を加えず、原本をそのまま他者に共有しなければならないというガイドラインが制定されたことを知った。

この教育を通して、写真を上手に撮る技術だけでなく、倫理や信頼性といった配慮すべき点の重要性に気づかされた。写真は視覚情報として大きな影響力を持つからこそ、信頼できるものであり、かつ記事の内容と正しく呼応していなければならないと強く感じた。



写真・映像教育



写真・映像実習

活動内容：

- ・国会議事堂内見学
- ・パクスヒョン国会議員 懇談会
- ・政治部門記者 懇談会
- ・夕食/韓国記者協会長、関係者

感想や反省点：

パクスヒョン国会議員 懇談会

今回の懇談会では、政治と報道という異なる立場から社会を見ることができ、大変貴重な経験となった。まず、パクスヒョン国会議員との懇談では、お忙しい中時間を割いて対応して下さったことに感謝している。日本でも国会議員と直接意見交換を行う機会は多くないため、非常に印象に残った。事前調査で地域活性化に取り組んでいることを知っていたため、2年間の支援金によってどのように長期的な効果を見込んでいるのか、また他にどのような施策を考えているのかについて質問した。地域の人口減少は日本でも大きな課題であり、韓国との共通点や相違点を比較したいと考えたためである。現在は試験的に10か所で実施されており、その一つが青陽郡であると伺った。一人当たり1万5千ウォンを支援し、地域内で経済が循環することや人口増加につなげることを目的としており、実際に青陽郡では1年ほどで約1000人の人口増加があったという点は非常に興味深かった。投資額は大きいものの、日本と同様に地域の人口問題に強い危機感を持って取り組んでいることを感じた。また個人的には、費用は予算として支出される一方で、その財源が国民の税金であることを常に意識し、節約している国民に誠意を示そうとする姿勢に強い印象を受けた。政治家としての責任感を感じ、率直にかっこいいと感じた部分でもあった。

政治部門記者との懇談

なぜ記者を志したのかという質問をした。現在自分自身が進路に迷っていることもあり、何か参考になる話を聞きたいと思ったためである。記者になる経緯は人それぞれであり、必ずしも言論に関係する学科出身である必要はないという話が印象的であった。記者は多くの人と関わる仕事であり、人との出会いに楽しさを感じる一方で困難も多いと語っていたが、それでも多くの人に情報を届けることにやりがいを感じている点に魅力を感じた。今回の経験を通して、将来の進路を考える際には職種の名前だけでなく、自分がどのような形で社会と関わりたいのかを考えることが重要だと気づいた。また、今後は事前調査をさらに深め、より具体的で本質的な質問ができるようにすることが自分の反省点であると感じた。



パクスヒョン国会議員と



政治部門記者 懇談会

5日目： 1月16日（金） 活動場所：

活動内容：

- ・ファクトチェック教育/キムシヨンシニアエディター
- ・記事作成
- ・夕食/オーマイニュース職員

感想や反省点：

ファクトチェック教育

ディープフェイクやチープフェイク、misinformation（誤情報）、disinformation（虚偽操作情報）、フェイクニュースなど、現代社会において問題となっている多様な情報の種類について学んだ。これらは単に情報の真偽を判断するだけでなく、情報の発信者が意図的に作成したものなのか、またその情報がどこから生まれ、どのように拡散されたのかを確認するための重要な分類であると理解した。また、ファクトチェックが2008年頃から本格的に行われるようになった歴史や、専門的にファクトチェックを行う職業が生まれた背景についても知ることができ、情報社会の変化とともに新しい役割が求められてきたことを実感した。実際に過去のニュースを題材として、どの種類の情報に当たるのかを考え、その内容が事実であるのか、虚偽である場合はどこから情報が発生したのかを分析する作業を行ったことで、情報を受け取る側にも判断力が求められていることを強く感じた。現在はインターネットや技術の発達によって情報量が非常に多く、何が真実であるのかを見極めることが難しくなっている。そのため、常に疑問を持ちながらニュースに接する姿勢が必要であり、場合によっては専門家や知識のある人物の意見を参考にすることも重要であると感じた。また、一度広まった誤情報が削除されることなく半ば真実のように残り続ける危険性についても認識することができた。

記事作成

事前に考えてきたトピックをもとに5日間かけて修正を重ねながら完成させた。自身の体験を題材としながらも、読み手が関心や気づきを得られる内容にすることの難しさを強く感じた。特に、内容だけでなく記事の構成にも注意を払い、読み手の関心が途切れないよう端的かつ明確に伝えることを意識した。オーマイニュースに掲載されるためには採択を受ける必要があり、結果を待つ間は非常に緊張したが、当日に採択の連絡を受け、自分の記事が実際に掲載されたことに大きな達成感を覚えた。その後、2週間ほど経って記事の「いいね」数が増え、ランキングが一つ上がったことで、少なくとも一部の読者に興味を持って読んでもらったことを実感し、大きな喜びを感じた。今回の経験を通して、日常の出来事の中にも記事の題材となる視点が存在することを学んだため、今後も日常生活の中で問題意識を持ちながら観察し、継続して記事作成に挑戦していきたい。



左) 修了書授与、パクスウォン本部長と

右) 5日間活動したオフィス

